

レンブラント「夜警(1642年)」の鑑賞題材化 (7段階鑑賞学習プログラム)の試み

—集団肖像画の読解的鑑賞の一局面(観察・記述と自由解釈を中心に)—

An Experimental Study on Making Art Appreciation Teaching Materials (The Seven-Stage Learning Program) by Using Rembrandt's "The Night Watch (1642)"

—An Investigation of One Aspect of Reading-Based Appreciation of Group Portraits
with a Central Focus on a Set of Observation and Description, and Free Interpretation—

岡田匡史¹

Masashi Okada¹

[要旨] 本稿は連稿前篇である。絵を見て読む、その複合的学習過程で感性・読解力・言語活用能力・美的批評眼等を総合的に養うことを狙う「読解的鑑賞」と、日本の中学生の西洋絵画(異文化体験的対象)との邂逅を契機に促そうと努める、「美術を通した西洋理解」の2つを、本稿の基柱と考える。バロック期からレンブラント「夜警(1642年)」を選定し、その鑑賞題材化の諸可能性を検討した。作品調査で収集した情報を土台に、さらには神林恒道の「夜警」鑑賞手引き、堀典子が社会的・歴史的観点から「夜警」解説に迫る鑑賞授業実践報告も参照し、鑑賞題材構想を具体化した。結果的にE. B. フェルドマンの4段階批評法を基盤に7段階・15項目で成る鑑賞学習プログラムを組織でき、本稿ではその第1段階「観察」と第3段階「解釈」を巡り論述した。残る第2段階と第4段階以降の考察は後篇に回し、最終段階で示した補充課題5個も次稿で詳述したい。

[Abstract] This article is the first part of the author's consideration on the various possibilities of how Japanese junior high school students learn Rembrandt's "The Night Watch (1642)" as the cross-cultural object. There are two themes to pursue as pillars. One is reading-based appreciation and another is to understand the West thorough its art. In his opinion, in the compound learning process of seeing and reading a painting, sensibility, reading comprehension, linguistic ability, aesthetic critical eyes, and so on are all cultivated. And he reflects that understanding the West starts from an encounter with a Western painting like Rembrandt's work which he selected from the Baroque era. By gathering beneficial information from researching this work, knowing Tsunemichi Kambayashi's guide of "The Night Watch" and referring to Noriko Hori's practice report of her class of learning it from social and historical viewpoints, his plan of art appreciation teaching materials certainly has developed. Consequently he organizes the seven-stage learning program (based on the idea of the four critical stages by E. B. Feldman) with fifteen items. He discusses the first and third stages (observation and interpretation) here. The second and fourth stages or later, especially five replenishment subjects will be examined next.

[キーワード] 読解的鑑賞, 美術を通した西洋理解, レンブラント, 夜警, 集団肖像画

[Key words] Reading-based appreciation, Understanding the West thorough its art, Rembrandt, The Night Watch, Group portrait

[所属] ¹信州大学 (Shinshu University)

[受理日] 2017年12月24日

1 はじめに

本稿は、第55回大学美術教育学会での口頭発表¹を素案・骨組とし、自作題材の授業検証も通じ進展し得た研究成果をここに肉付けし構築し直したものである。最終的に7段階で組織される鑑賞題材(第4章で解説/図2参照)を提起するが、全体の考察事項が多いため、内容を前篇・後篇に分け、連稿形式(I・II)でまとめる。

本稿では、選定作品概説、先行事例説明の後、7段階を概述し、内容の連係の優先から変則的順序となるが、第1段階「観察」と第3段階「解釈」を論じる。第2と

続く第4～7各段階の主要事項の重点的論考は次稿に回し、補充課題(第7段階)は後篇で詳述したい。

絵を見るだけでなく諸角度から読むことを促進でき、鑑賞過程で西洋理解も深まり得る鑑賞対象を、筆者としてはカラヴァッジョ²に続くバロック期の絵となるが、レンブラント「夜警(1642年)」(図1)とした。諸局面の個別作品記述は、本稿諸処で展開する。

「夜警」選定理由は、表1にまとめたので参照願う。初期検討段階を経、口頭発表時には、第6点目として、「文化・伝統的要素が凝縮」³し、「西洋理解に有効な媒体と判断」⁴できる字義通りの名画である点も挙げた。

表1：「夜警」選定理由

*第55回大学美術教育学会（北海道大会）『研究発表概要集』p.80より転記（一部修正/次段落に繰った⑥も列記）。

- ① レンブラントの画業で最高峰に位置付くと一般に解される点
- ② リアリズムに憧れる描画発達期の児童・生徒が特別な価値を置く迫真性・巧緻性を具備した写実様式である点
- ③ 現実性と幻想的虚構性が混在する物語画的特質を有す点
- ④ 本作が日本の学習者にも身近な記念撮影写真と似た『集団肖像画』である点
- ⑤ 学習者の関心を惹くエピソードが豊富である点
- ⑥ 文化・伝統的要素が凝縮し、西洋理解に有効な媒体と判断できる字義通りの名画である点

作品選定時に特に意識したのは、日本の文化圏で育った中学生が異国オランダに誕生した絵と時空超え遭遇する異文化理解的側面、そして、未知の画面から無数の要素を発見・抽出・言語化（言葉による理解の精緻化）し、それらの総合的関連付けを図り、鑑賞対象を可能な限り精緻に解釈・思索し深く学ぶ読解的側面である。

対象学習者は、「読解力・言語活用能力の成長、既習体験の蓄積等鑑み、対象を日本の中学生（高学年児童も可能と想定するが）とした」⁵が、加うるに、勤労する市民層が躍進し、商業的・文化的に興隆した17世紀オランダへの視座が養われる、社会科での歴史学習⁶も、中学生を好適な学齢と解した理由の1つである。

なお、自作題材の学齡的適合性を確認・検討すべく、鹿野耕平教諭（信州大学教育学部附属松本中学校/美術科）より支援戴き、第3学年対象に授業検証が実施できた。が、その時の活動の綿密な検討は別稿に譲りたい。

2 「夜警」の背景と基本的な表現特質の概説

本節では中学生に鑑賞を求める選定作品を概説する。

「夜警」は18世紀末辺りで定着した別称⁷で、正式名称は、アムステルダムの国立美術館（所蔵先）によると、「フランス・バニング・コック隊長の指揮下にある第二軍管区の市警備隊（Militia Company of District II under the Command of Captain Frans Banninck Cocq）」⁸となる。ただここでは、小学館『世界美術大全集（第17巻 バロック2）』記載の題名（作品解説：尾崎彰宏）⁹を標準と捉え、「隊長フランス・バニング・コックと副官ウィレム・ファン・ライテンブルフの市民隊」を使用する。

アロイス・リーゲルによると、本作も属すオランダ限定様式の集団肖像画はアムステルダムとハールレムで量産された¹⁰。彼はこれを「自主独立の個人をメンバーとする自発的な団体の表現」¹¹と定義し、「コルポラティオニスポルトレート団体肖像画」¹²とも呼び得るとした。小林頼子は、「集団肖像画とは、ある組織に属する成員を一図に描き込んだオランダ独特の肖像画形式」¹³と規定し、ベータ・ズールはその対象範囲を論じ、孤児院等福祉施設理事や射手組合・ギルド・



図1：レンブラント・ハルメンスゾーン・ファン・レイン（Rembrandt Harmensz. van Rijn）「夜警（隊長フランス・バニング・コックと副官ウィレム・ファン・ライテンブルフの市民隊）」1642年カンヴァス、油彩 379.5 × 453.5 cm アムステルダム、国立美術館
画像出典：https://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/thumb/2/28/The_Nightwatch_by_Rembrandt.jpg/1259px-The_Nightwatch_by_Rembrandt.jpg

外科医組合メンバーを挙げた¹⁴。

集団肖像画は功成り名遂げたと自認する市民層に支持され、「夜警」も例外でなく、蓄財も位階も貴族級の隊長・副官と裕福な布地商らで構成された火縄銃手組合によって委嘱された。完成作はアムステルダムの「クロフェニールスドゥーレン火縄銃手組合本部」¹⁵（高山宏は『銃士隊練兵館』と訳出¹⁶）に、他の集団肖像画に混ざって展示された。ズールによれば、ドゥーレン練兵館で射手は緊急時に備え練習に励み、集会を催し、隊員が居並ぶ公式肖像画を飾った¹⁷。

マリエット・ヴェステルマンによると、火縄銃手組合には軍事的特権として、「マスケット銃の携行、射的訓練の指導、行進中の火器の使用」¹⁸が認められた。ただし、実態は「社交クラブ」¹⁹に近く、愛国心に溢れ、自警意識・郷土守護の自覚が高く、血気盛んな隊員で成ると言っても、「夜警」制作当時、戦闘状態は既に無く、平和で出番は無かった。サイモン・シャーマによれば、アムステルダムには「いしゆみ三つの組合」²⁰として「弩射手、長弓兵、火縄銃兵」²¹が存在したが、その実際の働きに関し、ヴェステルマンは、「市民隊は長年市門の警備と秩序の維持をつかさどってきたが、17世紀に入る頃には、すでにその役割は名目化していた」²²と書く。

画面中央、圧倒的存在感を放つ2名は、向かって左が隊長フランス・バニング・コック、右が副官ウィレム・ファン・ライテンブルフである。隊長が挙げる手の影が副官のコートに落ち²³、当場面に照射するのが陽光だと悟る。完成後に他の画家が加筆したと、ヴェステルマンが指摘するカルトウーシュ盾形紋章（銘板）²⁴には、隊員18名の名前が認められるが、画中人物総数は31名（画布切断前は33名）

で、高橋裕子によれば、半数近くが「エキストラ」²⁵である。レンブラントは物語画と匹敵し得る劇的な出撃場面を創出しようとする主題的意図から増員を図った。

集団肖像画は、今日の観点から見れば、存在理由を自ら顕彰・記録する記念撮影写真と似、実際、多くの絵で構成員多数は均質に整列・勢揃いする。

三浦篤は上記性格を整理し、大事なのは「全員の顔がはっきり見えること、扱いの重要性にさほど差がないことでした。互いにお金を出し合っただけの肖像画を描いてもらう以上当然の要求であり、草創期のオランダ肖像画には単に頭部を並列しただけの生硬な表現すら見られません」²⁶と論じた。

集団肖像画に潜む問題点をズールはこう記す。

「まず、画面がきわめて大きかった。しかもそこに大勢の人物を、グループとして相互に関連させつつ、配置しなければならなかった。その上、それぞれの人物ははっきり識別できねばならない。」²⁷

しかし、「夜警」は破天荒な程に集団肖像画の定型を破った。バルトロメウス・ファン・デル・ヘルストラ同期の画家達が描くのは、精細な描写に則る厳密な肖似性、不動の姿勢の反復的配列（一同集合状態）、各人重んじる平等主義、メンバー全員を遍く照らす均質な光等を規範としたが、「夜警」は遙か遠くを目指していずれからも逸脱し、集団肖像画の在り様を根本的に塗り替えた。

シャーマは、レンブラントの革新性を構図設計的観点から、「要するにただ一人一人どんどん重ねていくしか能のない型通りの市警軍肖像画のフォーマットに乗せなかったというだけのこと」²⁸と評した。さらに「夜警」に内在する慣例化した整列凍結状態を打ち崩す力強い動勢、隊長が発する出陣命令を受け皆一斉に動き出す瞬発力、前方へ突進する運動性を見抜き、こう具体的に説く。

「男たちはいつ見ても、そこに集まり、銃を撃ち、太鼓を打ち、将校は叫び、犬も叫び、旗はふられ、前進、前進。この映画の一フレームは静止することを拒む。」²⁹

小林は、登場人物が精彩を放ち個性的で活気付き、人間関係や出来事までもが推量可能な演劇性豊かな物語画的特質への着眼から、「夜警」の群像表現に「物語画に近い構想性」³⁰を読み取る。同種作品観を拓ける形で、シャーマは、「夜警」を、「まずは集団肖像画であり、歴史画もどきである。寓意画タブローであり、幻出現の絵であり、私見ではとりわけ、絵画なるもの自体の超越と生彩をめぐる個人的な観想でもあった。これらすべてがただ一枚の画布の上で生じている」³¹と書き、「バロック美術の極致」³²とも指摘した。ヴェステルマンも、「肖像、寓意、そして物語の要素を統合した《夜警》は市民隊肖

像画の歴史において無比の存在で、この分野における類例は見あたらない」³³と総括した。

ケネス・クラークはイタリア盛期ルネサンスの影響を喝破し、「夜警」の特異性をこう記した。

「実際、まさにこうした盛期ルネサンス的な壮さ、比率、画面構成およびキアロスクーロ（明暗法）によって、『夜警』は十七世紀オランダで描かれたそのほかの集団肖像画から劃然と分けられるのである。」³⁴

完成作を当時実見したサミュエル・ファン・ホーホストラテン（1640年代前半期のレンブラントの弟子）の見解も、「夜警」の本質を突く貴重な記録である。以下、シャーマの著書中の引用箇所より転記したい。

「この絵はどう批判されようと、どの競争相手より長く生き残っていこうと。それほど絵画的（*schilderachtigh*）かつ強力な絵なので、人によっては練兵館の他の絵など、この絵の横ではトランプの暇潰しにしか見えないと言っている。」³⁵

「夜警」は「市庁舎の小軍事会議室」³⁶への移設時（1715年前後）、狭い壁面に収めるべく、左右上が切り詰められ、左端2名が消えた³⁷。この状態で、現在、国立美術館（アムステルダム）2階、聖堂で言う^{アプス}と後陣に当たる「Night Watch Gallery」に祭壇画然として展示されている。

過去3回、ナイフや酸の被害に遭うが、惨き試練通過後も防護ケースに入れる措置は取られず、監視員1名が脇に立つだけである。筆者が鑑賞した時は、学齡異なる学習者集団が入れ代わり立ち代わり絵の直ぐ前に陣取り、指導者の説明を聴いていた。一般鑑賞者（含観光客）は後ろを取り巻く。惨事に断固屈せず、絵を守る大切さをも伝え教える文化継承策として教育を最優先する姿勢に、アムステルダム魂を感じた次第である。

3 「夜警」鑑賞の参考資料と先行的授業実践事例

3-1 神林恒道の「夜警」解説

中学生を学習者に想定した題材構想段階で、『西洋美術101—鑑賞ガイドブック』に神林恒道が書く「夜警」の見開き2頁³⁸が、授業計画を練る際、参考となった。

右頁上段に「夜警」色刷図版が掲載される。先ず絵を見遣り、次いで下段に載る絵の大掴みな概容と鑑賞の要点、興味を惹くエピソード等を読む（この間、絵と文の往復的相互確認が進む）。解説によると、原題は、「バニング・コック隊長と副官ウィレム・ファン・ライテンブルフの市警備隊」³⁹と長く、しかも実際は白昼の出動場面。銃手組合が自らの会館壁面を飾る集団肖像画なのに、或者は中央で目立ち、或者は背景・周縁部で霞む。不公

表2:第7章「鑑賞の方法」で提起の作品アプローチの諸観点(総数7個)
*堀典子, 2003, 「『視覚造形作品を体験し理解する』—芸術受容への導入/解読の試み」, 『平成13-14年度科学研究費補助金基盤研究(B)(1)研究成果報告書』, p. 316より転記。

美術史芸術学に基づいた芸術作品への古典的・理論的アプローチ	①形体的, 分析的観点 ②解釈学的観点 ③記号論的観点 ④図像解釈学的観点 ⑤伝記的, 心理的観点 ⑥社会的, 歴史的観点
試みとしてのアプローチ	実験的観点

平では? 画料は? 均等割りだと不平も出よう。「夜警」の当時の評判は? 興味が連鎖するよう文章が続く。

左頁に移ると, 作者・題名・作品情報に目が留まる。ここは美学・美術史的観点に立つ知的好奇心・学習意欲を刺激する記述で成り, やや専門的な内容, 即ち画家の表現意図や絵画観, 人物描写の独自性や人生模様等を理解する過程が組まれる。読者は知る楽しみ・面白さを味わい体験できる。読み終えると, もっと知りたくなる。

観察→情報収集(絵からも言葉からも)→解釈・発見・疑問・問題意識の醸成→知り学ぶ過程→主体的調査→感性・審美眼・批評的態度の啓培と鑑賞の成熟, こうした発展型を上記構成に読み取ることが可能である。

3-2 堀典子の「夜警」鑑賞授業

堀典子は, ドイツの高等学校の準教科書である, ヨハネス・キルシェンマン&フランツ・シュルツ共著『視覚造形作品を体験し, 理解する』を要約し⁴⁰, その第7章「鑑賞の方法」記載の「美術史等に基づいた古典的方法」を組み立てる計6種観点(表2参照)からの「芸術作品へのアプローチ」に準拠する鑑賞授業⁴¹を実施した。その中に「夜警」鑑賞も位置付けられる⁴²。

「夜警」は, 「社会的, 歴史的観点からの芸術作品へのアプローチ」を扱う箇所では取り上げられ(図版選定協力者: 鈴木桂子⁴³), 作品誕生の経緯・背景や火縄銃手組合の構成員・社会的任務・機構的特徴, 各人物の服装・装身具・持ち物や行動特性等をまとめた鑑賞テキストが準備された(作成協力者: アストリッド・アルベルシーニ女史⁴⁴)。鑑賞授業はこの鑑賞テキストを土台に進められ, 学習途次, 質疑応答も繰り返し配された。

鑑賞テキストは中学生に伝えたい指標的事項を確認・整理するのに益する所大であった。取得情報や学び得た指導的視座は, 題材構想に効果的に反映させたく思う。堀・受講者間の質疑応答からも多くの示唆を授かった。

「レンブラントはこの絵の中に歴史, 伝統, そしてギルドの役割などについての彼の深い知識を, 多様なエレメントを使って表現している」⁴⁵と堀は説くが, 絵を独特な仕方では結晶させる画家・時代間の相互作用を重要視

表3:「美術を通じた国際理解」なる語が登場する記載箇所の比較
*上段:平成20年版(現行)『中学校学習指導要領』第6節美術(第2各学年の目標及び内容)〔第2学年及び第3学年〕2内容B鑑賞(1)ウ/下段:平成29年版(新版)『中学校学習指導要領』第6節美術(第2各学年の目標及び内容)〔第2学年及び第3学年〕2内容B鑑賞(1)イ(イ)

日本の美術の概括的な変遷や作品の特質を調べたり, それらの作品を鑑賞したりして, 日本の美術や伝統と文化に対する理解と愛情を深めるとともに, 諸外国の美術や文化との相違と共通性に気づき, それぞれのよさや美しさなどを味わい, 美術を通じた国際理解を深め, 美術文化の継承と創造への関心を高めること。
日本の美術作品や受け継がれてきた表現の特質などから, 伝統や文化のよさや美しさを感じ取り愛情を深めるとともに, 諸外国の美術や文化との相違点や共通点に気づき, 美術を通じた国際理解や美術文化の継承と創造について考えるなどして, 見方や感じ方を深めること。

しつつも, 鏡たる絵に映し出された世界は必ずしも現実とは一致せぬとの見識も示し, 画家と絵を巡る史的背景・生活環境的諸相を客観的に学ぶ必要性を強調した⁴⁶。「夜警」鑑賞が導く西洋理解に関しては表3参照。

4 7段階・15項目の鑑賞学習プログラムの提案

鑑賞学習(中でも絵を読む読解的鑑賞)を組織する際, 筆者が参考としてきたのは, エドムンド・バーク・フェルドマンが, 「批評活動は計4段階に分割可能だ」⁴⁷として設定した, 「記述, 形式的分析, 解釈, 評価」⁴⁸の四事項で組むフォーマット, 即ち4段階批評法である。「4段階は多少重なり合う場合もあるが, 本質的に相違う活動内容」⁴⁹と認識し, 活動の段階的道筋に関しては, 「個別から一般へ, 易から難へ」⁵⁰到るとの考えを彼は示した。

4段階批評法の特記できる第一は, 構造が明瞭な点。第二が, 言語重視という特質。第三は, 前半2段階が全員参加を実現できる点。作品提示後, 「どう思う?」といきなり問わず(この種の問は応答可能者を絞ってしまう), 先ず視覚による客観的な確認・識別と命名(語彙拡大を期待)を要請する。第四は, 続く第3段階で厚み増す作品理解を基盤に主体的態度で解釈が構成できる点。そして, 第五が, 一連の段階を経て, 根拠に基づく作品批評(他者との意思疎通も含む)が可能となる点である。

筆者はこれを改良し, 中盤に調べ学習と自説 vs. 他情報の弁証法的統合をも狙う再解釈の二段階を挿入し, 計6段階の基本型を拵えた⁵¹。本稿では, この骨組を計10項目で肉付けする授業案(図2)を提起する。

さらに今回は密度濃き鑑賞を促す補充課題を第7段階に据え, 5種選択肢(残り5項目)も準備してみた。

5 題材設計上の重点事項

5-1 観察と記録(視覚的な印象・体験の言語化)

絵(ここでは写実様式的範疇を念頭に置く)の場合, 写真のような意図せぬ写り込みは無い。鳥が舞うなら,

1. 【観察（＋記述・発表【視覚的体験の言語化】）】
 - ①画面の詳細な観察 ※観察の方法・形態：スクリーンへの投影（パワーポイント等）、収蔵先 HP の閲覧、電子黒板での提示（高精細画像も可能）、タブレット操作（個別的な調べ学習も保証し得る）、複製資料（含ワークシート）の配布、学校図書館（配架の画集・図録類）の利用。
 - ②描写対象リスト作り（＋個別発表→情報共有）※解釈始動のための助走段階：視認対象の列記過程に読解的動機が内在し、語意チェックも働く。
2. 【形式的分析】
 - ③形・色彩・材質感、油絵の具の多層賦彩法、画面の形状、明暗法、遠近法、人物の彫像的量塊性や動勢、描写精度の幅、各部の短縮法的処理、ポーズ、顔の表情（喜怒哀楽の源）、空間（余白・背景）、構図即ち諸要素の組立て・配置構成・統合的組織等を具体的に学ぶ。
3. 【解釈】
 - ④自由解釈 ※読解内容（ストーリーと換言可能）をワークシートに各自綴る（グループワーク・対話型鑑賞も有効）。
 - ⑤国語科と連携した絵からの物語作り ※「夜警」に対応する物語を考え、完成段階で発表、または、書き綴ったワークシートを壁面掲示（→相互鑑賞）。
4. 【知識補填（生徒側）←情報提供（教師側）】
 - ⑥図書館蔵書かインターネットによる調べ学習 ※最初は個人的関心を尊重し、1人が基本。最終的に所属班に情報を持ち寄り班内で意見交換を行う。
 - ⑦調査成果の班発表（情報交換【知識・理解の拡張】）※発表形式：口頭で勿論 O.K. だが、情報機器の積極的活用も図る。
 - ⑧教師の重点的解説 ※図像学的特徴、美術史的背景（画家【特に人間性】・表現意図・描法の特徴・様式特性・画歴・作品履歴等）、エピソード（題名に反し昼間の出陣場面、「夜警」制作時の妻サスキアの死、女兒に妻の面影、銃の撃ち方の3段階図解の挿入、後景隊員2名の間に顔【自画像？】、花環状縁飾り付桶に注文者18名の名前が列記、市庁舎移設時の画面切断、暴徒による三度の被害と奇蹟的修復等）を軸に説き、知る醍醐味を伝達する。
5. 【再解釈】
 - ⑨解釈の整理・再構築 ※ワークシートに調査後の考えを書く（個人活動→発表会）。調査途次、自由解釈と違う事実説明や定説的見解に遭遇すること自体が、有意義な学習体験だと説き、美術史では寧ろ未解明部分が研究推進力となって魅力的諸学説が誕生する現況を理解させる。学習場面での解釈は正解を示すことではなく、獲得できた様々な情報を関連付けあれこれ諸角度から考え続けることに意義があり、完璧な完成型は存せず、何度も練り直す継続的更新・彫琢にこそ真価を認め得ると説く。
6. 【判断と評価】
 - ⑩総括 ※最後に省察段階を設ける（ワークシートで振り返る）。1～5.の学習を経る中で熟してきた理由・根拠・判断基準を明示し、感想・評価を書く。
7. 【補充課題（5つの選択肢）】
 - ⑪出撃シーンの東西比較（レンブラント『夜警』vs. 伝常磐光長『伴大納言絵詞【平安末期】』下巻「伴大納言追捕のためその邸に向かう検非違使の一行」）
 - ⑫絵を聴く（聴覚的観察：隊長の号令、銃声、太鼓の音、歓声【どよめき】、隊員間の雑談、少女達の声、槍と槍が当たる音、靴音、犬の吠え声…）
 - ⑬レンブラントを探せ！（群像の中から自画像を見付けるゲーム的展開）※鍵を握る作例：「ピロート製ベレー帽を被る自画像（1634年/ベルリン絵画館蔵）」etc.
 - ⑭登場人物を真似、絵を精度高く再現するロールプレイ（別称ジェスチャーゲーム）
 - ⑮脱整列型のオリジナル学級記念写真の撮影（by デジカメ or タブレット/参考資料：浅田政志、2008、『浅田家（写真集）』、赤々舎）

図2：7段階（15項目）の授業計画（鑑賞題材【集団肖像画の鑑賞—物語を感じ取り想像し読む】）* 想定対象：中学生

その鳥も偶然の刻印ではなく、前景を占める主対象同様、画家が或意図の下に持てる技量を駆使して描き入れた対象であり、もしかすると絵を解釈する上で決定的に重要な寓意的メッセージが込められている可能性すらある。

だからこそ、絵画鑑賞の第一歩とは観察であり、絵の具等の媒材への豊富な見識と蓄積されたメチエ（技能的経験知）を礎に、画家が目・頭・手を緊密に連動させて描く要素1つ1つを見落とし無く探査し、細大漏らさず把握することから始めるべきである。そして、かような鑑賞手法は難しくなく総ての絵に適用でき、誰にでも可能で、かつ、集中的・持続的に学ぶ態度を養う。

「夜警」の鑑賞も観察から始めるが、見るだけだと既観察対象が数を増し始めた時点で何を見たかが判然としなくなってくる。そこで、記録する。でも、個々対象をデジカメ等で撮影したのでは切りが無く、模写的図解も時間を要すから、何を見たかはその名を筆記用具で紙に書き留めるのが实际的である。絵の種々要素と文字記録を見比べ確認し合うのを効率化すべく、観察対象一覧表を作るのも一案（筆者推奨）である。ここから新たな視野、絵を読む領域が開けてくる。視覚的体験を言語化する試みが、絵を読む初歩の手続きとなるからである。

「夜警」を酷評したウジェーヌ・フロマンタン⁵²でさえも、粗搜しの態度でもとも言えようが、画中要素を仔細に観察しているので、下記記述を先ず参考としたい。

「『夜警』の画面には様々なものがある——剣、マスカット銃、矛、磨き上げた兜、金銀を象嵌した咽当て、履き口が漏斗型の長靴、紐つきの短靴、青い絹の房飾りが付いた矛槍、太鼓、槍。」⁵³

フロマンタンは、他箇所では、描法の曖昧さを非難するに際し、「手に持つもの——マスカット銃、矛槍、太鼓のばち、杖、槍、旗棹」⁵⁴を列記している。

そのフロマンタンが「夜警」の一隊の突出的前進の動勢、計算付く精密極まる構図の力動性、主題が統率する画面構成の凝縮力を看過したと指摘するシャーマ⁵⁵も、卓抜たる視力で画面観察を遂行し、登場人物を「街頭興行の役者一座」⁵⁶と揶揄的に解し、「雇われ鼓手もいれば、爆弾運搬小僧の大き過ぎる兜はまるで道化師だし、槍兵役、銃士役、揃い踏みである」⁵⁷と書く。

観察方法と用具・機器等は図2に列記した。関連し、鑑賞に要す作品提示媒体の精査を通じ、各媒体の相違う特性を検証した三根和浪の研究成果⁵⁸からは有益な実践的示唆が得られる。高精細画像操作やインターネット利用が可能なタブレットを使うICT教育的取り組みについては、大黒洋平教諭（荒川区立諏訪台中学校【東京都】）のDNPミュージアムラボ（大日本印刷）と共同した鑑賞授業実践（対象：第1学年）⁵⁹が参考となる。

5-2 観察成果に則る自由解釈の展開

人々の均質的併置を心掛ける記念撮影型群像表現を前にしても、感情移入・想像力起動・感動・場面解読等は凡そ期待し難い。だとしても、作り笑い、澄まし顔、気取り・自慢・誇示のポーズ、眉間に皺等の顔貌等、表情・仕種からの情緒的読み取り・論理的推察は或程度可能であろう。一般的な集団肖像画でも自由解釈の余地はある。

「夜警」は定型的・画一的様式と異なり、人物間に様々な姿態・行動・容貌・服装等が確認できる。最前景の2

名は衣裳も顔の向きもポーズもまるで違う。シャーマの説明を借りれば、隊長は「黒づくめで胴部にかつと燃えるオレンジと赤の飾帯を巻いた」⁶⁰ 装いで、杖を突き、左手を前に差し出す（出陣命令の合図で、見事な奥行短縮法）。副官は「絢るく光る黄のもみ革のコートはお洒落な蝶りボンの飾りがつき、縁の模様も実に豪華」⁶¹、「騎士の乗馬靴」⁶²を履き、青白綿布で飾る幅広の鉞を握る。

2名の背後は、「角製火薬入れ」⁶³を持って走る男児、銃士3名（弾薬を籠める者、撃つ者、火皿を吹く者）、「猛烈に吼えたてる獵犬」⁶⁴（大雑把な描写）、鼓手を置く。

銃士3名の内、「侏儒銃士」⁶⁵とシャーマが記す、足を踏ん張り銃を撃つ二番目の者は見落としがちである。隊長・副官の間に銃身が覗き、銃口からは白煙が噴射するが、副官の黄白色の煙突帽の羽根飾りと同化し、発砲は視認し難い。隊長・副官への観者の集中的視線を妨げぬ巧妙な処理とも解せる。直ぐ後ろの隊員は吃驚して身を逸らし、不意の射撃を制止するポーズを取る。「3人は左から右の順番で」⁶⁶、「『弾薬の充填』《発射》《灰の除去》」⁶⁷と、「一連の銃の取り扱いを実演し」⁶⁸、『銃器の教練（1607年刊）』に3種行為に対応するジャック・デ・ヘイン2世の挿絵（ロバール・ド・ボードゥス版刻）が載る⁶⁹が、つまり「夜警」には市警備隊の象徴たる銃の操作手順の図解までもが組み込まれているのである。

さて、石段一段目の印象的形像は、観者側を見遣りながら右方向に動く感じの女兒（奥にも女兒1名）である。中景と最上段では、兜や煙突帽始め各種帽子を被る者達が長槍・鉞槍・旗・銃を手に思い思いのポーズを取る（中には雑談する者も）。シャーマによれば、市警軍士官は制服を持たず、服装は多様である⁷⁰。当時流行の蛇腹状の襷襟⁷¹もあちこち認められる。背景を凝視すると、甲冑姿の隊員と旗手の肩越しに行進を見届けんとするベレー帽の男の顔に気付く。異様に輝くやや虚ろな右目に釘付けとなる。自画像の可能性が高く、シャーマはその目を「レンブラントその人の目だ」⁷²と断じ、「それこそ指揮とる者の目ではないのか」⁷³と問題提起した。

石造りのアーチ（凱旋門？）の前に勢揃いした一隊は、これから石橋を渡り（模写では左切断部に欄干や水門を確認できる）、恰も画面を突き出て前方へ進まんとする。隊長の合図（少し口が開く）で迫真的臨場感が頂点に達する。それがゆえ、「夜警」は物語の一場面とも映り、鑑賞者は想像を大いに掻き立てられる。

ここを踏まえ、観察が導く自由解釈を「夜警」鑑賞の主要段階とした。自由解釈の展開として、国語科的発想で絵から物語を作る作文的課題も有効と考える⁷⁴。

表4：「夜警」からの自由解釈①（〈図画工作科指導法基礎A〉受講者）

<ul style="list-style-type: none"> ・教科書で見たと記憶する。フランス革命。1名が指を差し、この方向に皆が進む。 ・戦闘準備。戦争に臨むが、左端に楽器を持つ子どもやスポットライトを浴びる少女もいる。 ・赤い服の人が銃を持っている。中央の光が当たる2名がリーダー格。
--

表5：「夜警」からの自由解釈②（〈初等図画工作科教育法〔a〕〔b〕〉[明星大学通信教育部夏期スクーリング]受講者）

(a)	<ul style="list-style-type: none"> ・左側の赤い服の男と中央右の男が決闘しようとする場面で、中央左の男が2人の間に入り、「まあまあ」と調停を試みる。 ・真中の黒い服の男は武器商人で、銃や槍等各種武器の使い方を示している。周囲にいるのは、捕虜や見物人達。少女の前に黒く脚だけ見える人物がいるが、何故このような描き方をされたのか、疑問だ。 ・敵を倒しに戦いに行こうとする所（出発場面）。ただ全員が同じ気持ちではない。中央2人が積極的に向かうのに対し、両横や後ろの者達はやや躊躇する感じ。傍らで犬が吠えている。 ・後ろの人物3人+少女がこちら（鑑賞者側）を見ている。こちらに何か特別な物があるからじゃないか？
(b)	<ul style="list-style-type: none"> ・兵士・貴族達が、時の政府に反対して立ち上がり、これから革命を起こそうとしている。少女が猫を追い駆ける。 ・強い光の中で、くっきり目立つように描かれた人達から、暗く描かれた人達まで、画面には多様な人物が登場する。その中で違和感を覚えるのは、光る少女と中央の人物の右隣の男で、男は幽霊みたい。写実的だが、現実と幻想が入り混じっている。見ると、真中の2人は意思明確そうだが、周りの人達は従ってゆくか思案中で、2人と一つ気持ちになっていない。白が正義、赤が中立を表す。 ・これから闘いに出る決起場面。少女の前で皆の進行を遮る、兜を身に着けた男は悪魔的。

平成29年度前期、担当授業科目〈図画工作科指導法基礎A〉で、「夜警」の観察・解釈二段階を受講者に体験させ、試行的に自由解釈を求めたところ、3名が挙手し発言したので、表4に概略を記す。

平成28年度明星大学通信教育部夏期スクーリングでも、担当授業科目〈初等図画工作科教育法〔a〕〔b〕〉で同様の活動を行った。その時はより詳細な自由解釈を聴け、表5に発言を要約・整理した。

信州大学教育学部附属松本中学校第3学年を対象とする本題材の検証授業（平成29年2月17日実施）の時は、ワークシートに自身の考えを書いて貰った。教師解説による知識補填前にこれを行い、次の課題を掲げた。「〈お話前 before lecture〉観察を踏まえ、想像力を働かせ、物語を構想するようにして、「絵の中で何が起きているのか?」、「皆は何をしているのか?」について自由に書こう。」結果は想定水準を超え、全般的に前段階の観察成果と密に連動し、想像・思考・創意の活性化を基盤とする着眼鋭く中身濃き読解を確認できた（表6参照）。

上掲3つの活動を進める際、主題把握面でヒントとなる題名は伏せたが、幅広い年齢層で本作が出陣場面と関連付けられた。中学生の意見を読むと、画中集団を自警団・義勇軍・パトロール等と画題通り解す見方も散見できた。と同時に、視認対象の解釈の方向性が個人的要因で微妙な差異を生んだり、独自の内容を備えたりもした。全く同じ解釈は存し得ぬとも言え、どれも個性的と考え得る⁷⁵。

「フランス革命（信州大学授業）」、「武器商人（明星大

表6：「夜警」からの自由解釈③（信州大学教育学部附属松本中学校第3学年/検証授業受講者）

・中世ヨーロッパで、革命前に志気を高めている場面のように感じる。位置的にも右肩から赤い布をかけている黒服の男がリーダーなのではないだろうか。そこへ歩み寄る白服の男は長年付き合っている友人で、最後の戦いへ向かうことを連想させられる。また、服装や武器に統一性がないことから貴族や軍隊ではなく、貧しい暮らしをしている一般人による義友（ママ→勇）軍であることが想像される。そこへ、犬も加わっていることで、彼らの志の方向性が一つの場所へ集約されているように感じる。

・格好良い。スチームパンクみたい。路地裏？で多分夜。何かと戦いに行くところ？（革命とか）太鼓とかで盛り上げて。でも軍隊じゃない。白い女の人は古い師か魔法使いとか、戦わないけど仲間。人質じゃない気がする。手前の白い人と黒い人がリーダーで、今作戦立ててる。中世から近世にかけてのヨーロッパ。棒（槍？）がまだたくさんあるから、増援がたくさん来る。そこらじゅうにランプ吊るしてありそう。鏡は宗教的な（ジンクスとかおまじないとか）理由で置いてあるんだと思う。

・中世の自警団…これからパトロールに行こうとしている。集合している。やりを持ち、弾をこめ、剣を手に持っているところから、奮い立ち、強くあろうという意志が伺える。中心の人物2名と、左や奥の女性に光が当たっている。強調している。→男性2人がリーダー的存在。女性も、夫たちの出発を前に不安ながらも送りだそうとしている妻（リーダーの）ではないか。周りがけっこう暗い…影、即ち住民たちの抵抗を表しているのでは。ものものしい雰囲気。群衆のオーラ。

・大事な戦いの前の晩に、みんなで酒を飲んで、楽器をひき「さあ、これから行くぞ。」と意気込んでいる。町のパトロールをみんなですて、この町を守るぞみたいになっている。また、ほうきを持っている人がいるので、町を良くするための集団みたいなもの。

・女の子の命を国の男の人たちが守ろうとしている。敵がくるのを待っている。

学授業)」、「スチームパンク（附属松本中学校授業）」等、斬新な読み解きも登場した。中学生の解釈が想像力旺盛で自由度高く、映画の一場面を髣髴させる隊長・副官間の友情・相互信頼を指摘する意見や、輝く女兒が出征を憂えるリーダー格の妻、あるいは、古い師・魔法使い・戦わぬが仲間（人質ではない）との多面的見方が確認できた。女兒の命を男達が敵の襲来から守ろうとしているとの見方も独創的で、意表衝かれ、絵が違って映った。

解釈自体が着眼・発想・切り口の発見等を要請する極めて創造的な営みであり、自由解釈は個々に閉じずに、語り合い聴き合い確かめ合って、感じたり考えたり面白がったり感心したり触発されて視野が広がったりする協働的学びの環境で行うのが最適と考える。

この形態を推進すれば、新版『中学校学習指導要領（平成29年3月31日告示）』第6節美術「第3 指導計画の作成と内容の取扱い」1(1)に初出のキーワード、「主体的・対話的で深い学び」も熟成可能なように思う。

6 おわりに（前篇総括と後篇予告）

連稿前篇の考察は以上とし、続きを次稿でまとめる。

「夜警」を画集・図録・書籍・所蔵館HP等で調べる過程で、鑑賞題材化に有益な多様な切り口を獲得でき、作品調査は教材研究のコアとの理解が一層深まった。

中でも興味湧くエピソードを鏤め、「夜警」鑑賞を手引きする神林の解説記事、社会的・歴史的観点からの「夜警」解説を試みる堀の授業実践報告からは本稿提案を支える具体的方向軸が得られ、7段階・15項目の鑑賞学習プログラムを現時点構想できた。

本稿では関係性が密の第1段階「観察」と第3段階「解釈」を重点的に扱う形で考察を展開した。中でも自由解釈は、続く調べ学習の展開や教師の情報提供に備えての確固たる土台となる読解パートと認識し、3種鑑賞授業における学習者のコメントも参照し検討を加えた⁷⁶。

次稿では、構図の観点から絵の仕組等の表現特徴を探る第2段階「形式的分析」に一旦戻り、第4段階以降を考察する。続けて諸種着想を体現したいと考える補充課題5種も論じ、全体を総括したい。

【謝辞】

検証機会を提供戴いた鹿野耕平教諭（信州大学教育学部附属松本中学校[美術科]）と生徒の皆様は紙面を借り厚くお礼申し上げます。

【付記】

本研究に当たり、日本学術振興会の平成29年度科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金（基盤研究(C)）「美術を通じた西洋理解」を推進する読解ベース型鑑賞指導メソッドの研究と題材構築」（課題番号JP16K04679）の援助を受けた。

【註】

- 岡田匡史, 2016.9.25（口頭発表）, 「レンブラント「夜警（1642年）」の鑑賞題材化の試み—集団肖像画の読解的鑑賞（物語を感じ取り想像し読む）」, 第55回大学美術教育学会（北海道大会）, 北海道教育大学札幌校・発表概要は、大学美術教育学会・教大協全国美術部門・北海道大会実行委員会, 2016, 『平成28年度日本教育大学協会全国美術部門協議会・第55回大学美術教育学会[大会案内 研究発表概要集]』, p. 80 参照。
- カラヴァッジョを扱う読解的鑑賞については、次の2篇参照。①岡田匡史, 2016, 「カラヴァッジョ「聖マタイの召命（1599-1600年）」の多角的読解の試み—祭壇画鑑賞の一提案」, 『美術教育学—美術科教育学会誌』, 37, 美術科教育学会, pp. 179-194 ②岡田匡史「カラヴァッジョ「聖マタイの召命（1599-1600年）」を学習材として使う読解主軸の鑑賞授業の考察—授業検証を通じた観察, 自由解釈, 情報提供（知識補填）, ロールプレイ等の分析を中心に」, 『美術教育学—美術科教育学会誌』, 38, 美術科教育学会, pp. 151-165
- 岡田, 前掲[1]（研究発表概要集）, p. 80
- 同, 同頁。
- 同, 同頁。
- 各社教科書では、西洋と邂逅する日本近世史の枠組で、ヨーロッパ諸国の歴史が概説される。特に次の二箇所参照。坂上康俊, 戸波江二, 矢ヶ崎典隆（代表）, 2016, 「オランダの台頭」, 『新編 新しい社会 歴史』, 東京書籍, p. 101 黒田日出男（監修）, 2016, 「一つに結びつく世界とオランダの繁栄」, 『社会科 中学生の歴史 日本の歩みと世界の動き』, 帝国書院, p. 89
- 夜と誤認された主理由として、物質面では保護用ワニスの黄変（暗色化 [埃付着も影響]）、技法面では暗域を強調し明域を際立って輝かせるレンブラントの特徴的明暗法を挙げるのが定説である。
- Rijksmuseum HP, <https://www.rijksmuseum.nl/en/general-information/building-and-presentation/night-watch-gallery/objects/#/SK-C-5,0>（2017年8月29日アクセス）
- 尾崎彰宏, 1995, 「^[146]レンブラント 夜警（隊長フランス・バニング・コックと副官ウィレム・ファン・ライテンブルフの市民隊）」, 坂本満, 高橋達史（責任編集）, 『世界美術大全集 バロック 2』, 小学館, pp. 460-461 参照。
- アロイス・リーゲル, 2007, 勝國興（訳）, 『オランダ集団肖像画』, 中央公論美術出版, p. 11 参照。
- 同, p. 13
- 同, 同頁。
- 小林頼子, 1994, 「肖像画とトローニー—レンブラントの場合」, オランダ政府美術庁（構成・監修）, 東京ステーションギャラリー/中

- 山三善, 池上浩生 (編集), 『17世紀オランダ肖像画展 (図録)』, p. 25
- 14 ベータ・ズール, 1994, 小林頼子 (訳), 「序論」, 同図録, pp. 17-18 参照。
- 15 尾崎, 前掲, p. 460
- 16 サイモン・シャーマ, 2009, 高山宏 (訳), 『レンブラントの目』, 河出書房新社, p. 500
- 17 ズール, 前掲, pp. 17-18 参照。
- 18 マリエット・ヴェステルマン, 2005, 高橋達史 (訳), 『レンブラント (岩波 世界の美術)』, 岩波書店, p. 169
- 19 バスカル・ボナフー, 2005, 高階秀爾 (監修), 村上尚子 (訳), 『レンブラント—光と影の魔術師』, 創元社, p. 77
- 20 シャーマ, 前掲, p. 496
- 21 同, 同頁。
- 22 ヴェステルマン, 前掲, p. 169
- 23 7段階の観点からは観察から解釈にステージが移るが, ここをシャーマは精緻に読み解き, 次の洞察を示す。「正面向きの指揮官と横顔のみの副官の関係を明示して遺憾ないのは, 命令を発するパニング・コックの手の影がファン・ロイテンブルフの衣服の上に落ちている仕掛けだ。指揮官の命令する声をそっくり絵に置き換えるとうなるという, まさしく絶妙の仕掛けであろう。」シャーマ, 前掲, p. 507
- 24 ヴェステルマン, 前掲, p. 169
- 25 高橋裕子, 2004, 「訳注 109」, ウジェーヌ・フロマンタン, 高橋裕子 (訳), 『オランダ・ベルギー絵画紀行—昔日の巨匠たち (下)』, 岩波書店, p. 286
- 26 三浦篤, 2009, 「第9章 肖像画—写実性と理想化のはざままで」, 『まなざしのレッスン①西洋伝統絵画』, 東京大学出版会, p. 186
- 27 ズール, 前掲, p. 18
- 28 シャーマ, 前掲, p. 507
- 29 同, p. 504
- 30 小林, 前掲, p. 26
- 31 シャーマ, 前掲, pp. 508-509
- 32 同, p. 508
- 33 ヴェステルマン, 前掲, p. 173
- 34 ケネス・クラーク, 1992, 尾崎彰宏, 芳野明 (訳), 『レンブラントとイタリア・ルネサンス』, 叢書・ユニベルシタス 308, 法政大学出版局, p. 119
- 35 Samuel van Hoogstraten, 1678, *Inleyding tot de hooge schoole der schilderkonst, anders De zichtbare werelt*, Rotterdam, p. 176「第九章 [註 36]」, シャーマ, 前掲, p. 718 より転記 (原著筆者未読)。
- 36 尾崎, 前掲, p. 461 画面切断と関わる構図の問題は次稿で扱う。
- 37 ヘリット・リュンデンスの「夜警」模写 (1649年頃) との比較照合で裁断箇所が特定できる。
- 38 神林恒道, 2011, 「レンブラント・ファン・レイン《夜警》1642年」, 神林恒道, 新聞伸也 (編著), 『西洋美術 101—鑑賞ガイドブック』, 三元社, pp. 82-83
- 39 同, p. 82
- 40 堀典子, 2003, 「「視覚造形作品を体験し理解する」—芸術受容への導入/解説の試み」, 堀典子 (研究代表者), 『鑑賞と表現の統合を図る (一体化を目指す) 鑑賞教育の方法論に関する研究—ドイツの後期中等教育における実践事例の分析をふまえて/平成 13-14 年度科学研究費補助金基盤研究(B)(1)研究成果報告書』, pp. 302-332
- 41 2000 年度後期開講の横浜国立大学院授業科目「芸術系教育カリキュラム論演習」で行われた。堀典子, 2003, 「現代ドイツの美術教育とギムナジウムの準教科書に基づいた鑑賞の授業の試み」, 同報告書, pp. 34-61 (後章) 参照。
- 42 堀典子, 「社会的, 歴史的観点からの芸術作品へのアプローチ」, 同, pp. 51-55
- 43 堀典子, 前掲「現代ドイツの美術教育とギムナジウムの準教科書に基づいた鑑賞の授業の試み」, p. 34 参照。
- 44 同, 同頁参照。
- 45 同, p. 52 参照。
- 46 同, p. 55 参照。
- 47 Edmund Burke Feldman, 1992, *Varieties of Visual Experience* (4th edition), Prentice Hall Inc., New Jersey & Harry N. Abrams, Inc., New York, p. 487
- 48 *ibid.*, the same page.
- 49 *ibid.*, the same page.
- 50 *ibid.*, the same page.
- 51 フェルドマンは知識を排除せぬが, 4段階メソッドでは批評対象の本質的理解に向かう発見・想像力・内省的探求等に重きを置くことから, リサーチは設けない。加え, 絵だと画中要素の純客観的列挙は稀で, 連想・意味付け・解説的説明等の諸解釈が記述段階で始動してしまうのを参観指導・検証授業等で見てきた点も考慮し, 4段階の骨格は保ちつつ鑑賞対象に応じメソッドの弾力的運用を図るべきとの判断に到り, 知識補填・再解釈を附した。なお, 和田学が既に指摘した点だが, ジョージ・ゲーヒガンはフェルドマンの4段階批評法を直進的階梯型だと批判的に解し, 批評学習は多様であり得, 次の三要素の活用を提案した。①美術作品への個人的応答, ②生徒のリサーチ活動, ③概念・技能と関わる指導。この内, ②の有効性を参考とした。See George Geahigan, 1998, "From Procedures, to Principles and Beyond: Implementing Critical Inquiry in the Classroom", *Studies in Art Education (A Journal of Issues and Research in Art Education)*, 39-4, National Art Education Association, pp. 293-308 和田学, 2007, 「フェルドマン (Edmund Feldman) の美術批評教育に関する研究」, 『美術教育学—美術科教育学会誌』, 28, 美術科教育学会, pp. 413-428 参照。
- 52 「第十三章《夜警》」, フロマンタン, 前掲, pp. 116-161 参照。
- 53 同, p. 142
- 54 同, p. 126
- 55 シャーマ, 前掲, pp. 503-504 & pp. 509-510 参照。
- 56 同, p. 508
- 57 同, 同頁。
- 58 三根和浪, 2000, 「小学校美術鑑賞作品提示メディアの研究」, 『美術教育学—美術科教育学会誌』, 21, 美術科教育学会, pp. 264-275
- 59 大黒洋平, 2014.2.26 (平成 25・26 年度授業力向上プロジェクト研究授業), 「比べる鑑賞 2—分類して作品を見てみよう! (美術科学習指導案)」, 荒川区立諏訪台中学校, pp. 1-4 参照。
- 60 シャーマ, 前掲, p. 506
- 61 同, 同頁。
- 62 同, 同頁。
- 63 ヴェステルマン, 前掲, p. 169
- 64 シャーマ, 前掲, p. 512
- 65 同, 同頁。
- 66 ヴェステルマン, 前掲, p. 170
- 67 同, p. 171
- 68 同, p. 170
- 69 同, pp. 169-170 参照。
- 70 シャーマ, 前掲, p. 506 参照。
- 71 鉄鍍で丹念に装作りをしたリネン製襦袢に関する, 「夜警」にも当て嵌まりそうな, 深井晃子の次の一文を参照。「フランス・ハルスやレンブラントらのオランダの市民集合肖像画では, よく手入れされたラフから, くたびれたラフまでが登場する。」深井晃子, 2009, 『ファッションから名画を読む』, PHP 新書 581, PHP 研究所, p. 86
- 72 シャーマ, 前掲, p. 514
- 73 同, 同頁。
- 74 絵の解説と国語科を巡っては, 次を参照。「4. 国語科との関連 (教科書掲載課題を中心に)」, 岡田, 前掲 [2] ②, p. 154
- 75 「夜警」解説体験から物語を紡ぐ, ビーター・グリーンナウェイ監督『レンブラントの夜警』(DVD 配給元: ジェネオン・エンタテインメント) と以下評言参照。「名画『夜警』に加えられる「解釈」という営みそのものを, 解釈行為の極みたる一探偵 (=画家) による殺人事件推理というテーマに映し出した, なかなかウィットイナ作品である。」[KINOKUNIYA 書評空間 BOOKLOG] HP, 〈高山宏の『読んで生き, 書いて死ぬ (2007.12.11)』〉, <http://booklog.kinokuniya.co.jp/takayama/archives/cat339/> (2017 年 9 月 11 日アクセス)
- 76 特に自由解釈を通じ, 集団肖像画を (今風に言えば) 記念撮影的記録からドラマ仕立ての物語画へと変革せんとした画家の意図を, 鑑賞者が直観的洞察により的確に捉え得るのを確認できた点は, 「夜警」の鑑賞学習を計画する上で大きな収穫であった。自由解釈が表現の本質に迫る精度は思ったより高いことが明瞭となった。